

(2) 上仰木遺跡

大津市の上仰木遺跡は、延暦寺にほど近い山麓に位置します。仰木と延暦寺の関係は深く、遅くとも、12世紀末には山門領仰木荘となったことが『山門堂舎記』によってわかり、現在にいたるまで延暦寺との強いつながりを持っています。

調査では、9世紀後半の製鉄炉と製鉄の過程で出た鉄滓を捨てた廃滓場、木炭を製造した窯、10～11世紀の銅の鑄造関係遺物が見つかりました。また、遺跡周辺からは、須恵器の窯跡も数多く見つっています。

上仰木遺跡およびこの周辺で鉄、銅製品、須恵器が生産された時期は、延暦寺で大規模な造営が始まった頃と一致することから、この遺跡は、造営を支えるための生産工房の一つであったと考えられます。



上仰木遺跡の出土遺構

5. 延暦寺から巣立つ

平安仏教から鎌倉仏教への展開

延暦寺は、良源が座主を務めていた10世紀頃に、皇室や有力貴族との繋がりが深まっていき、寺領荘園が多く寄進されました。このような権門化が進む一方、源信によって浄土信仰が大成されるなど、思想面では、新たな展開を見せていくこととなります。

その後、延暦寺は、法然、親鸞、一遍、栄西、

道元、日蓮らなど数々の名僧を輩出しました。彼らのような鎌倉新仏教の開祖の他にも、日本仏教史上著名な僧の多くが若き日に延暦寺で学び、巣立っていきました。そのため、延暦寺は「日本仏教の母山」とも称されるのです。

6. おわりに

このように、平安時代は、延暦寺が広い信仰と広大な荘園経営による経済力を背景にして、政治・思想・文化に影響力を及ぼした時代でした。これが、後の日本の歴史に大きく影響を与えていく要素の一つとなります。



今回紹介した遺跡の位置図

平成22年(2010年)2月

滋賀県埋蔵文化財センター
〒520-2122

滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

電話 (077) 548-9681

FAX (077) 548-9682

E-mail shigamaibun-center@guitar.ocn.ne.jp

URL http://www3.ocn.ne.jp/~shiga-mc/

近江の平安時代

1. はじめに

781年に桓武天皇が即位すると、政治の立て直しのため、寺院勢力が強かった平城京から784年に長岡京、続いて794年に平安京に都を遷します。都に隣接する近江は、東山道・東海道・北陸道が通過するため、都の東の玄関口として、また、琵琶湖を利用した船運により、政治的にも経済的にも、重要性を増していきます。

一方、比叡山には延暦寺が建立されます。延暦寺は、宗教的な権威により、多くの荘園を得ることになり、その結果、延暦寺は荘園経営による経済力を背景に、社会的な特権を有する大勢力(権門)として伸びて行きました。

今回は、平安時代の近江について、「比叡山延暦寺と天台宗」をキーワードにご紹介します。

2. 比叡山延暦寺と天台宗

(1) 延暦寺の概要

大津市坂本本町の延暦寺は、788年、最澄により開創され、比叡山の山上から東麓にかけて境内に点在する東塔、西塔、横川など、三塔一六谷の堂塔から構成されています。現在、東塔、西塔、横川、飯室谷の一角が史跡に指定されています。

比叡山は、『古事記』にも見えるように最澄以前にも神が宿る神体山として崇められていました。

最澄は、渡来系氏族の三津首の出身で、近江国滋賀郡に生まれ、785年に東大寺で戒を授かり、近江国分寺に入ります。しかし、すぐに国分寺を出て比叡山中に草庵を結び、12年間、籠山修行を行いました。788年、東塔の根本中堂の位置に、一乗止観院(比叡山寺)を建立します。804年、最澄は遣唐使の一員として唐へ渡り、翌年に帰国すると比叡山で天台法華宗を開きます。最澄没後の822年、大乗戒壇院建立が嵯峨天皇によって許され、翌年、「延暦寺」の寺号が与えられました。

延暦寺は、その後、円仁・円珍・相応・良源・源信ら多くの高僧達を輩出し、仏教界の一大勢力となりました。

しかし、933年に山門(円仁派、延暦寺)と寺門(円珍派、園城寺)に分裂し、互に争うようになりました。また、「山法師」とも呼ばれた「僧兵」は、強訴を行って朝廷も苦しめたことはよく知られています。



比叡山延暦寺の東塔根本中堂

(2) 発掘された延暦寺

境内で最初に実施された発掘調査は、大正12年の横川の如法堂^{にょぼうどう}の調査です。この調査では藤原期の華麗な金銅経箱^{こんどうきやうばこ}が発見され、国宝に指定されています。

延暦寺では、東塔・西塔・横川における、堂舎^{どうしや}の建て替えや防災工事に伴って多くの発掘調査が行われました。9世紀中頃までの遺物が出土していますが、延暦寺草創期の遺構や遺物はまだ確認されていません。

また、東塔・西塔の主要建物周辺の調査では、伽藍^{がらん}を構成する建物の多くが、建て替えを行うたびに、敷地の造成^{そくせい}を繰り返し、建物の規模を拡大してきたことがわかりました。そのため、前身建物やそれに関連する遺構は、再建時の造成により、かなり破壊されたり、削り取られたりしたようです。



延暦寺の発掘調査の様子

平安時代の遺物を伴う整地層は、東塔では大講堂^{だいこうどう}、法華総持院跡^{てんぽうりんだう}、西塔では転法輪堂^{てんぽうりんどう}（釈迦堂）周辺で確認されています。

そのうち、大講堂西側の整地層から出土した9世紀中頃から10世紀にかけての土器群の多くが、近江（特に湖西地域）で生産されたものであることが明らかとなりました。これは、円仁を中心とした延暦寺の寺観^{とこの}が調えられる時期であり、そのために近江で生産された多くの物資が供給されていたことを示

しています。

3. 延暦寺と係わりの深い社寺

(1) 日吉神宮寺遺跡

日吉神宮寺遺跡^{ひよしだいしや しんたいさん}は、日吉大社の神体山である八王子山のさらに奥、横川方面への山道の途中にあります。最澄の伝記『叡山大師伝^{えいざんだいしでん}』には、最澄の父が男子出生を祈願し、最澄自身も比叡山入山前に祈願したとされる場所は、「叡岳の左脚、神宮の右脇」と記されており、当地がその場所として有力視できます。

大津市教育委員会が行った調査では、10～11世紀頃の非常に硬く叩きしめられた地面や石列、石敷きなどが確認されました。また、この硬い遺構面の下に、1m以上にも及ぶ造成層が確認されました。ここからは、9世紀前半と考えられる土師器^{はじき}碗が出土しており、創建期の遺構が存在する可能性が考えられています。



日吉神宮寺遺跡出土遺構(大津市教育委員会提供)

(2) 日吉大社

比叡山麓の坂本にある日吉大社は、山王権現^{さんのおごんげん}、日枝とも呼ばれるように、もとは比叡山を神体山とする祭祀の場でした。東本宮・西本宮の両社を核とした山王七社^{さんのおしちや}を中心に発展し、延暦寺が開かれてからは、その守護神として、また、全国約3800社の日吉（日枝）神社の総本社として、厚い信仰を集め、

現在その境内は史跡に指定されています。

延暦寺との関係の深さは、12世紀初頭から延暦寺の僧兵が、日吉社の神輿^{みこし}を担いで平安京に乱入する強訴^{かうそ}（神輿振り）を繰り返したことからわかります。



山法師強訴図(滋賀県立琵琶湖文化館所蔵)

(3) 浮御堂遺跡

大津市本堅田にある浮御堂^{まんげつじ}（満月寺）は、10世紀末に、源信が湖上の安全を願い、建立したと伝えられます。源信は、浮御堂に千体阿彌陀仏^{せんたいあみだぶつ}を安置し、西方浄土の池を感じて極楽を思う「水想観^{すいそうかん}」の修法を行ったとされています。

浮御堂周辺の湖底調査では、浮御堂自体に関わる遺構は見つかりませんでした。和鏡^{わきやう}や古銭^{こせん}、墨書土器^{ぼくしよどき}や石帯^{せきたい}、土錘^{どすい}などの平安時代～室町時代の遺物が見つかりました。こうした出土遺物から浮御堂周辺地域は、9世紀前半までは公的な性格を持っており、その後の9世紀後半～13世紀代までは漁場として利用されていたことが明らかになりました。

堅田は、平安時代末には「堅田綱人^{かたのあみひと}」を主体とした京都下鴨神社の「御厨^{みくりや}」となりました。堅田御厨では毎日水産物を献上していたことから、琵琶湖での自由な漁業権や通行権が保証されていました。また、この頃、堅田は、延暦寺の荘園でもありました。この複雑な領有関係を背景にして、堅田の人々は、琵琶湖

琵琶湖全域での漁業や水運などに関する利権を掌握していくようになります。



浮御堂遺跡の調査状況

4. 延暦寺を支える

(1) 正伝寺南遺跡

高島市新旭町の正伝寺南遺跡^{しやうでんじみなみ}は、安曇川^{あどがわ}によって形成された沖積平野^{ちゅうせきへいや}に立地する延暦寺の荘園と考えられる遺跡です。10世紀後半頃に、掘立柱建物^{ほったてばしら}から構成される小規模な集落が営まれますが、12世紀後半～13世紀中頃に棟数が増加し、建物の規模も大きくなり、大規模な集落に発展します。

正伝寺南遺跡がある木津荘^{こうづのしょう}は、12世紀半ばに山門領になったことが『天台座主記^{てんだいざすき}』に見られます。この延暦寺が管理する荘園となる時期と、遺跡の規模の拡大の時期が一致することが、調査によって確認されました。



正伝寺南遺跡の掘立柱建物跡